

ある博物館への憧憬

伴 義 孝

関心事に引かれて、一度は、訪れてみたいという所が誰にもあろう。私にとって、そこは、ネアンデルという溪谷（タール）地であった。ドイツのデュッセルドルフの近郊、そこに、こぢんまりとした博物館がある。

はじめて訪れたのは1988年であった。ずっと以前からのある憧憬があって、そしてその頃執筆中であった『身体運動の人間学』（晃洋書房）にネアンデルタール人を取り上げていた関係で、どうしても見ておかなければならないと考えたからである。

1856年、その溪谷の洞窟で、最後の化石人類の人骨が偶然に発見された。発見地に由来して、ネアンデルタール人と命名されることになり、これを契機にして、人類学論争に一層の拍車がかかることになる。

ネアンデルタール人は、いまから10万年ほど前に地球上で生活しはじめ、3万5千年ほど前に、現生人類の始祖クロマニヨン人にとってかわられて、絶滅した旧人である。その出土した人骨や生活用具とした石器類などから類推して、そう位置づけられている。生活圏も広範で、現ヨーロッパ・アフリカ・アジアの各地に点在したことが判明している。

私の専門は人類学や考古学ではない。単なる一体育家が、何故に、このネアンデルタール人

に興味を覚えることになったのか。それは、寒冷地にも生在圏を拡大するという高度な生活適応技術を具備し、死者の弔いに花を献じるといった精練された精神文化を享受していたとされる彼らが何故に絶滅してしまったのか、という疑問から始まった。

もちろん門外漢の私だから、その疑問を、専門分野の知見にならって、学問的に解明しようなどとの大それた野心は持ち合わさない。切掛はこうだった。

日本で「運動不足症」問題が浮上しだしたのは1970年頃からであって、やがて、この文明病は子どもの身体をも蝕み始める。1980年代になると、本来あろうはずがない、子どもの糖尿病が観察されるようになった。身体運動と食生活のアンバランスが正犯だった。

この頃、私の研究課題は、その、身体運動と人間生活の係に傾いていた。しかも直立2足性という、人間存在の、根源的な身体運動様式を問い始めることになったのである。

そんな矢先、児童文学としても紹介された、ある新鮮な小説に出会った。3部作からなる『始原への旅だち』（J、アウル・中村妙子、評論社）という大河小説だった。この小説は、大地震に遭遇したクロマニヨン人の少女「エイラ」が、ネアンデルタール人の一族に助けられて、育てられることから始まる。

事実、考古学の教えるところ、現生人類の祖先クロマニヨン人は、出現した3万数千年前からおよそ3千年間は旧人ネアンデルタール人と共存しつつ次第に交代していった。

その人類進化史上の交代劇を縦軸にして、ネアンデルタール人の一族と共生しながら自立していく女性「エイラ」の葛藤を横軸にして、小説は展開していく。

作者アウルが小説技法として、際立てて、その両者を特徴づけたのは、狩りのための石投げ技術と水泳の抜き手技術において、ネアンデルタール人の一族に比較して、抜群の能力を発揮するエイラの姿であった。つまり、身体運動の



写真① ネアンデルタール博物館

問題を設定して、あたかも、両者の交代劇にその能力の差が決定的要因になったことを、手法として、匂わしたのである。

人類進化上、直立2足歩行・走行は、特有の姿勢保持能力と、バランス能力と、関節の自由度とをもたらした。石投げにも抜き手にも、その、関節の自由度がモノを言う。関節を十分に稼働させて正確な身体運動を行うためには、姿勢保持能力とバランス能力がしっかりしていなくてはならない。

身体運動に労働のほとんどが委ねられていた時代、その能力の差異が大きければどうなるか。自明である。こうしてネアンデルタール人は、狩り場から追われたのではないか。

デュッセルドルフは、ルール工業地帯のビジネス・センターで、ドイツの繁栄を支える心臓部だと言われている。日本の商社も数多い。そこから電車でわずか20数分のところに、ネアンデルタール駅がある。線路は溪谷の小高い丘の上を走る。駅も丘の上にある。

1988年の晩夏のある日、この駅に降り立ったのは、たったの5人だった。一組の老夫婦と、一組の女子学生2名と、それに私だった。5名は、何も存在しない周辺を見渡して、まず驚いた。無人駅とも思える所に着いて、これは辺鄙な所にやって来てしまったとの顔色が互いに読み取れた、そのことが印象深い。

その丘を下って、20分も歩けば、「ネアンデルタール博物館」に辿り着く。道すがら、「鹿に注意」の標識が、やたらと、目に入る。一帯の溪谷は自然公園として、あるがままに、保存されている。都会の騒音は一つも存在しない。その辺りを散策さえすれば、ネアンデルタール人の気分も満喫できる。

画期的な歴史上の発見を伝えてくれる、この



写真② 1856年発見の「人骨」

博物館は、平屋のお粗末なものであるが、ドイツ人気質を髣髴とさせて、それはそれで納得もできる。日本なら、さしずめ、大金を投じて過剰に作りあげたかもしれない。展示物も、決して、数多くはない。しかし、模型ディスプレイをじっくり眺めながら、思索に耽る静かな時間が約束されている。そして、この貴重な化石人骨は、訪れる人々をして、現代人の生き方のなんたるかを考えさせてくれる。辺りの溪谷を散策すれば、なおさらのことに、そうなる。

初期ネアンデルタール人はともかく、イラクのシャニダール洞窟で発見されたネアンデルタール人の肩甲骨及びその他の骨格には、顔と頭を除けば、現代人のそれと比較してさほどの相違はないことが判っている。

さすれば、上記の小説仕立ての状況設定から私が勝手に推論した、関節の自由度の問題から派生する、仮説は無効になる。では、何故に、彼らは跡絶えてしまったのか。ある仮説では、顔と頭の骨組みの相違を比べて、言葉を発するために必要な音域に限度があって、それが決定的要因だったとも言う。

しかし、それまでに絶滅してしまった人類の起源を辿ると、前記の身体運動仮説は有効であると証明されている。門外漢の私にも、このように、ネアンデルタール博物館は夢多く語りかけてくれる。爾来、機会があれば訪ねて周辺の溪谷を歩くことにしている。



写真③ 複元模型